

Title	神宮文庫本『発心集』の法師像
Sub Title	The image of Buddhist priests in the Jingu bunko manuscript of the Hosshinshu
Author	山部, 和喜(Yamabe, Kazuki)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.63, (1993. 3) ,p.289- 305
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	松原秀一教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00630001-0289

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

神宮文庫本『発心集』の法師像

山 部 和 喜

はじめに

『打聞集』（下帖）の第一条「達磨和尚事」に、天竺から唐へ尋ねてきた僧が、旅路の途中ですれ違った人物こそが達磨であったのだと語る、次のような言葉がある。⁽¹⁾

天竺ヨリ渡僧聞テ申、道ニ流砂ト云所ニ、年八十計ノ老僧ノ腰枉タルガ、草鞋イノ半足ヲハキテ早ニ天竺ヲマニ参ハ、サハ此和尚ニコソアリケレ。ナゾノ老法師ニカ有覽ト思テ、无礼ニ腰ウヤヲダニセテ過ニケルカナ。カウ知タラマシカバ扨テ契リマウシテマシトテ、

達磨に出会った時に、それと気付かなかった自分自身への無念さを激しく吐露するこの言葉で、同一人物を「和尚」、「僧」、「法師」呼び分けていることに注目したい。この「天竺ヨリ渡僧」は、達磨とすれ違ったその時には、「和尚」、「老僧」でもなく、彼を「老法師」と把握した。

法師については、既に今成元昭氏が『平家物語辞典』に「僧、出家」と「下級の僧」という二つの語義を示され、さらに山下正治氏の一連の論考により、その時代的変遷を含めた包括的な検討が加えられた。山下氏は、最初、大変高い身分の僧侶を指す語であった、あるいは尊称として用いられていた「法師」が、徐々に一般的な僧侶を示す広い語意を持つようになり、後にむしろ低い階層の僧侶を指す語になって、時として謙遜して自分を指すのに「法師」という語が使われるようになったと整理された。³⁾

ここでそれに付加すべきことは何もないが、やや視点を変え、説話の仕立て方という方向からすれば、僧とも呼ばれる人物がなぜある時には法師と呼ばれたのかという問題は残るであろう。先の『打聞集』の例も、法師が下級の僧を指すという語義から逸脱はしないのだが、その正体を見破れなかった「天竺ヨリ渡僧」が、まさに遭遇した時に、達磨を法師として捉えたことの背景を考えてみる必要はありそうだ。なぜ、一度は「老僧」と呼んだのに、過去のその時点に立ち戻った意識の中では、「老法師」と呼ばねばならなかったのか。

『発心集』の中にも先の『打聞集』の例に類似した、法師と呼ばれる者達がいる。彼らは、みすばらしい身なりをして、どこからともなく出現しまたどこへともなく消えていく。本稿ではそのような法師に係る問題を、異本系の神宮文庫蔵本（以下神宮本と略称す）において検討し、流布本系の慶安四年刊本（以下慶安版と略称す）との比較の中で、両本の説話の語りの質的な違いについて考察を試みる。

—

まず、『発心集』における法師の一般的な語義から確認する。神宮本と慶安版の両本において法師に関する部分に、異

同の見られない箇所法師の姿を見ておきたい。ここでは、単に僧侶という身分を示すと思われる用例（例えば第14話（第二九話）の「サラバ我ヲ唯今ニ法師ニナセト言」等）は考察から除外する。あくまで、『発心集』で法師と呼ばれる人物のそれぞれの形態に注意してみたいからである。

①第1話（第一話）「玄賓僧都遁世逐電事」

此渡守リヲ見レバ、髪ハヲツツカミニニウウ計リ生タル法師ノ、キタナゲナル布衣キタルニテナンアリ。⁽⁴⁾

②第2話（第二話）「同人宮仕ニ伊賀ノ郡司ニ事」

伊賀ノ国ニアル郡司ノ許ニ、怪ゲナル法師ノ人ヤ仕給フトテスッロニ入りタル有リケリ。

③第6話（第六話）「高野南筑紫ノ上人ノ発心ノ事」

漸ク時^トテイト怪ゲナル法師^ニ蓑笠著タルガ詣テ来テ拜ミアリク有ケリ。

④第28話（第三三話）「蓮華城入水事 入水ノ時後悔シテ物怪ニ成テ来事」

近キ比蓮華城ト云人ニ知レタル聖在。登蓮法師相知テ事ニ触テ情ヲカケツ、過ケル程ニ…

⑤第38話（第四七話）「日吉ノ社ヘ詣ル僧死人ヲ取棄ル事」

中比ノ事ニヤ、或ル法師世ニ有ヒテ京ヨリ日吉ノ社ヘ百日詣ル有ケリ。

⑥第42話（第七四話）「郁芳門院ノ侍長住ニ武蔵野ニ事」

西行法師東ノ方エ修行シアリキケル時、月夜ニ武蔵野ヲ過ル事有ケリ。

⑦第47話（第三七話）「松室ノ童子仙ト成事」

此ノ房ニ有法師ノ薪ギ取ラントテ山深く入タリケルニ…

①、②は、玄賓が山科寺を去り、諸国を流離っている時の姿であり、③は明賢阿闍梨の「様ヲヤツシ」た姿である。④の「登蓮」には、特に下層性を示す語句はなく、⑤は両本「僧」とも呼ぶ人物であり、僧・法師という呼称が重なりあう例である。⑥の「西行法師」には、山下氏の論考が有るが、ここでは①、②と同じく流離っている者である。⑦の法師は山奥に仙人となった童子を発見する人物だが、引用文にもあるごとく、房の薪を用意するいわば下働きをする者であり、『元亨釈書』、『三國伝記』は、それぞれ「僕」、「坊中下法師」とする。これらの例は、その人物の最初の登場の部分を掲出したもので、説話中の誰かの視点から見たものではない。以上、両本共通に法師と呼ぶ人物、及び人名に法師の付く人物を列挙したが、そこには確かに低層の僧形の者を指すという傾向は確認される。また、先の例以外にも神宮本独自の説話、慶安版独自の説話において法師と呼ばれる人物があるが、この方向性に変化はない。⁵⁾

自称として用いられた法師についても、簡単に確認しておく。第2話(第二話)「同人宮仕伊賀ノ郡司事」にある「深キ犯ナラズハ、此法師ニ許シ給ヒテンヤ。」は、玄賓僧都が旧知の大納言の家を尋ね、自分の主人である郡司を許してくれるように依頼する場面で出てくる言葉である。「此法師ニ」とは、「この私に免じて」ほどの意味であろうか。また、第34話(第一八話)「楽西上人事」にある、楽西が清盛の援助の申し出を断る時の言葉の、神宮本「此法師知給ズトモ更々事カクマジ。」、慶安版「此法師ガ知申ズトモ更々事欠クマジキ也。」は両本間に異同はあるが、「此法師ガ知申ズトモ」とは、「この私が(清盛に)親しみ交わり申し上げなくても」の意、慶安本では「私のことをご存じなくとも」と主語が清盛になるのだろうか。どちらも自称の言葉として考えられる。その他、神宮本独自部分(第62話「永観律師事」、第29話「仙命上人事」)に、同様の謙遜の意味を込めて自分を指した法師の用例が見られる。

以上のように、『発心集』の神宮本、慶安版の共通部分にはやや下級の僧を指す法師の用例と、自称の用例が認められ

る。先の今成氏、山下氏の示された語義になんら逸脱していない。

二

次に法師という語に関して、両本の異同のある部分を吟味してみたい。後述することく、法師という語の下級の僧という性質は、神宮本の方がより正確に示していると考えられる。

①第3話（第三話）「平燈供奉晦レ跡趣ニ与州ニ奉」

（神宮本）

其後遙ニ程ヲ経テ、人モ通ヌ深山ノ奥ノ清キ水ノ有所ニ
死人ノ有ト山人ノ語ケレバ、怪ク覚ヘテ尋行テ見レバ、
此師西ニ向テ掌ヲ合テ居タリケリ。阿闍梨憐ニモ尊クモ
覚ヘテ、泣々兎角ノ態ドモ管ニケリ。

②第47話（第三七話）「松室ノ童子仙ト成事」

（神宮本）

サテ此師三月ニ竹生嶋エ詣タリケル十八日ノ暁キ、遙ニ
エモ云ハヌ楽ノ声聞ユ。

③第21話（第五一話）「執心ニ依テ亡妻現身ニ夫家ニ帰リ来ル事」

（神宮本）

（慶安版）

其後ハルカニ程ヘテ、人モカヨハヌ深山ノ奥ノ清キ水ノ
アル所ニ死人ノ有ト山人ノ語ケルニ、アヤシク覚ヘテ尋
行テ見レバ、此法師西ニ向テ合掌シテ居タリケリ。イト
哀ニ貴ク覚テ、阿闍梨ナクトカクノ事ドモシケル。

（慶安版）

サテ此法師ハ三月十七日ニ竹生嶋ヘ詣デタリケルニ、十
八日暁ノネ覚ニ遙ニエモイハレヌ楽ノ声聞ユ。

（慶安版）

近キ世ノ不思議也、更ニ浮タル事ニ非トテ、叡山ノ澄憲
法印人ニ語レケル也。

是ハ近キ世ノ不思議ナリ、更ニウキタル事ニ非ズトテ、
澄憲法師ノ人ニカタラレ侍シナリ。

④第40話(第五二話)「不動ノ持者生レテ牛トナル事」

(神宮本)

イミジク哀レニ覚レバ、此ノ阿闍梨物ニ米ヲ入テキトコ
ヨト云ヒケレバ、走り向テ牛食物ヲナン食シケリ。サテ
モ仏ノ御誓ノ空シカラザル事如此。

(慶安版)

イトイミジウ哀レニタウトク覚ヘケレバ、小法師物ニコ
メイレテチト持テコヨト云捨テ、走り向テ牛ヲシバシ留
テ食物ヲナンムアタヘリケル。仏ノ御誓ノムナシカラヌ
事如此。

①の第3話(第三話)「平燈供奉晦跡趣与洲事」は、「ヤゴト无キ人」として、比叡山にあつた平燈供奉が「門乞食」として伊予の国に暮らしていたのを、弟子の静真阿闍梨に見付けられ、再び身を隠すという話である。引用部分は、再度身を隠した平燈の死を弟子の阿闍梨が知る場面である。山人の言葉を聞いて、「怪ク覚ヘテ尋行テ見」たのは、弟子の阿闍梨である。彼は一度「門乞食」の姿の平燈の正体を見抜いており、彼の視点から捉えた「西ニ向テ掌ヲ合テ居」た人物は、「師」とあるべきだろう。「古事談」、「三國伝記」の同話では、死体を発見した樵夫の目から捉えて「門臥」とし、その言葉に従つて「守已下拳詣ニ山中ニ礼敬」(『古事談』)、「阿闍梨ヲ始トシテ国司以下ノ人々拳ツテ山中ニ敬礼スルニ」(『三國伝記』)とする。また、平燈は伊予の国では「門乞食」と国人から呼ばれ「法師」とは一度も呼ばれない。もし阿闍梨が正体を見抜く前と同じ姿であつたことを示す言葉だとしても、むしろ法師ではなく門乞食と表現されるべきだろう。

②の第47話(第三七話)「松室ノ童子仙ト成事」は、「松室ト云僧」のもとにいた児が、法華経読誦の仙人となつて、以前の師に竹生鳴での仙人による楽奏のための琵琶の手配を依頼するという話である。引用部分は、既に彼に琵琶を用意した師が、当日竹生鳴に出かけた場面である。その人物を神宮本は「師」、慶安版は「法師」と示す。確かに一般的な僧侶を指す語と考えるならば、この「師」もまさに法師の一人であり、その意味では慶安版の本文も間違つてはいない。しかし該話には、先の両本に共通する異同で見た、薪を拾いに山に入る法師が登場している。とすると、児、師、法師という三人の出でくる話においては、竹生鳴に出かける人物を示す語としては神宮本の「師」の方が適当であろう。

③の用例は、説話の語り手としての澄憲を「法印」、「法師」とそれぞれに捉えたものである。字体の近似から来た誤写も想定すべきで、慶安版の法師が誤りだとは言えないが、言うまでもなく澄憲は法印となつており、神宮本の方がより細かくその僧位を見ようとしているとはいえよう。

④の第40話(第五二話)「不動ノ持者生レテ牛トナル事」は、極楽房阿闍梨が、荷を背負い坂道を上る牛を不動の侍者たる童子が手助けするという夢を見るが、目を覚ますと同じ牛が房の前の坂道を上つており、牛と生まれかわつた現世においても、不動はその加護を忘れなかつたと知れるという話である。引用部分は、阿闍梨がその牛に食物を与える場面であるが、慶安版と神宮本では、登場人物、事実関係に差異がある。それぞれに合理化が進んでおり、早急には判断できないが、それに続く「仏ノ御誓ノ空シカラザル事如此」という言葉との関連から考えると、牛が人語を解したとする神宮本の方が、夢の不思議と眼前の出来事とが結び付き、「仏ノ御誓」の現実性が確認される。しかし、慶安版では、そのような前後との有機的な繋がりが見られず、ここでは神宮本の意味を重視したい。

このように見てくると、少なくとも神宮本の方が法師という語に対して、その階層の低さをより正確に捉えていると

は言えそうである。それによって、神宮本は、第47話（第三七話）における、童子・師・法師という三人の人間を正確に示している。多分にそれは、神宮本が登場人物の仏教的な階層についてより厳密に繰返しを厭わずに示していること、さらには第1話と第5話に連続する「ヤゴトナキ人（智者）」という言葉（慶安版は第四話で「並ナキ」となる）への注意、あるいは仏徒の階層による第1話と第24話の説話配列なども関係があるだろう。⁽⁶⁾しかし、問題はそれだけに留まらない。

三

これまで、語句のレベルでの両本の法師について見てきたが、ここでは、先の『打聞集』に似ているとした、『発心集』中の法師の説話について考えてみたい。第2話（第二話）「同人宮仕伊賀ノ郡司事」を取り上げる。伊賀の国のある郡司のもとに「アヤシゲナル法師」がやって来て働くようになる。その郡司が国を追われることになった時、法師は主人である郡司と一緒に京に上り、郡司のために大納言の許しを受けると、そのまま姿を消してしまう。ところが実はその法師とは玄寶僧都のことであった、という話である。以下、問題となる部分（I、II、III）を、話の進行に従って提出した。Iは説話の冒頭で、「アヤシゲナル法師」が郡司の前に現れる場面、IIは法師と郡司の二人が京に着き、法師が大納言邸に入っていく場面、IIIは説話の末尾の部分、その法師が忽然と姿を消す場面である。

I

（神宮本）

（慶安本）

伊賀ノ国ニアル郡司ノ許ニ、怪ケナル法師ノ人ヤ仕給フ
トテスゞロニ入りタル有リケリ。主ジ此ヲ見テ、ワ僧ガ
様ナル者ヲ置テハ何ニカセン。无用ナリト云。法師ノ云
様、我等ハ法師ナリトモ男ニハカワル事不可有。如何ナ
ル態ナリトモ身ニ堪エ事ヲバ仕ラント云ヘバ、サヤウナ
ラバヨシトテ留置ケリ。此法師悦テイミジウ仕ハルレバ
誠ニ痛馬ヲゾ預ケテカワセケル。

II
(神宮本)

京ニ到リ著テ彼在所近ク行キ寄テ法師申様、人ヲ尋ント
存ルガ此姿ノ怪シク思ヒ侍ルニ、衣袈裟尋ネ給ヒテンヤ
ト云フ。則借リテキセツ。主ノ男ヲ具シテ門ノ外ニ置テ、
法師差入りテ、物申サント云フ。侍ヒニ集リタル者共怪
シゲニ見ケルガ、縁ヨリ下ヌ。伊賀ノ男ニ門ノ外ヨリ是
ヲ見テ、愚ニ思ハンヤワ。アサマシト守リ立チタリ。則
カクト聞テ、大納言急ギ出合テモテナシ騒ガル、事限リ
无シ。

伊賀国ニ或郡司ノモトニ、アヤシケナル法師ノ人ヤ仕給
トテスゞロニ入来ルアリケリ。主コレヲ見テ、和僧ノ様
ナル物ヲオキテハ何ニカハセム、イト用事ナシトイフ。
法師ノ云様、ヲノレラホドノ物ハ法師トテヲノコニ替ル
事ナシ。何ワザナリトモ身ニタヘム程ノ事ハ仕ラムト云
ヘバ、左様ナラバ吉トテ留ム。説テイミジフ真心ニツカ
ワルレバ、殊ニイタワル馬ヲナムアツケテカワセケル。

(慶安本)

京ニ至リ著テ彼ミモト近ク行ヨリテ法師ノ云様、人ヲ尋
ント思フニ此形アヤシク侍ベルニ、衣袈裟尋ネ給テムヤ
ト云フ。則カリテキセツ。主ノ男ヲ具シテ彼ヲ門ニヲキ
テ、指入テ、物申侍ベラムト云ニ、コ、ラアツマレル物
ドモ此人ヲ見テハラノトヨリヒザマツキテ敬ヲ見ル
ニ、伊賀ノ男門ノモトヨリ是ヲ見テ、ヲロカニ覚ヘムヤ
ハ。アサマシトマモリ奉ル。即カクト聞テ、大納言イソ
ギ出合テモテナシサワガル、様事ノ外ナリ。

(神宮本)

其時大納言、兎角可申アラズ、御房ノ承ル事ナレバトテ、
本ヨリ猶マサル様ノ庁宣給ハリケレバ、悦テ出ヌ。此由^f
ヲ主ノ男ニ申タリケレバ、アキレ惑ル様理リ也。余ノ事
ニハ中々心中ノウレシキモ色ソハ得モウチ出ズ。宿ニ帰^g
リ閑カニ聞ヘント思程ニ、衣袈裟ナド差置キテ、チト立^h
出タル体ニシテ何クトモナク隠ニケリ。是モ玄賓僧都ノ
シ態ニナン。有難カリケル人ナリ。

さてIでは、「スゞロ」に現れた法師が郡司に傍線部a「ワ僧」と軽蔑の意を込めて呼ばれること、法師自身の自分な
どは傍線部b「法師ナリトモ男ニハカワル事」はあるはずもないという言葉など、その身の卑賤さは、疑うべくもない。
実は引用部分以降に、細かな語句の異同は有るが、法師という人物に対する基本的態度には両本に違いはない。

しかしII・IIIの部分には、注意すべき異同が幾つかある。両本の差異を、法師と郡司との関係、法師と邸内の者との
関係という、二種類の間関係から検討したい。結論を先に述べるならば、慶安版が、語句の上で法師という仮面を途
中から取り去ってしまい、その正体が半ば以上透けてしまっているのに対し、神宮本では、ほぼ最後まで法師という仮

(慶安本)

トカク申スベキナラズ、左様ニテオハシケレバ、ワザト
モ思シルベキ男ニコソ侍ベルナレトテ、元ヨリモマサッ
マニ説ベキ様ノ庁宣ノタマハセタリケレバ、説デ出^f
ス。又伊賀ノ男アキレマドヘル様理ナリ。サマノニ思^g
ヘドアマリナル事ハ中々エウチ出サズ。宿ニ返テノドカ^h
ニ聞ヘムト思フ程ニ、衣袈裟ノ上ニアリツル庁宣サシヲ
キテ、キト立出ル様ニテヤガテイツチトモナク隠ニケリ
トゾ。是モ彼玄賓僧都ノワザニナム。アリガタカリケル
心ナルベシ。

面を取ることではないのである。

まず慶安版における法師と郡司の人間関係を見ていく。Ⅲの傍線部g「宿ニ返テノドカニ聞ヘムト思フ程ニ」という郡司の心中思惟の時点では、郡司の意識の中ではっきりと人間関係が逆転している。「聞ヘム」という敬語から、少なくとも郡司は法師が只ならぬものであることを了解している。さらに、Ⅲではもはや「主」、「主ノ男」とは呼ばれず、傍線部f「伊賀ノ男」と呼ばれるようになることが注意される。法師も「法師」とは呼ばれない。つまりⅢでは、郡司に使われていた法師と、その主人である郡司という主従関係は言葉の上からは消滅しているのである。

ではどこでその転換がなされたのだろうか。三木紀人氏は、Ⅱの玄賓が変身した時、つまり傍線部c「衣袈裟」を身に付けた時から主従関係が逆転するとされた。⁷⁾ たしかに、以降は法師という語もなく、門の所で郡司が内部を見る視線も、傍線部e「アサマシトマモリ奉ル」という玄賓への敬意を含んだ表現で示される。ほぼこの時点で、主従関係は消滅し、法師でもなくなったと語句の上から見るができる。

この二人の関係は神宮本ではどうだろうか。まずⅢの傍線部g「宿ニ帰リ閑カニ聞ヘント思程ニ」という部分では、慶安版と同様に郡司は気付いていたとみてよい。ただ、Ⅱの部分では、衣袈裟に着替えた後もこの人物は法師と呼ばれ、Ⅲの大納言の館を退出して、待っていた男に序宣を手渡す場面でも、傍線部f「此由ヲ主ノ男ニ申タリケレバ」とあり、語句の上から法師とその「主」である伊賀の郡司という主従関係は続いている。Ⅱの門外からの郡司の視線も、傍線部e「アサマシト守リ立チタリ」と、敬語表現では示されない。つまり神宮本では、衣袈裟に着替えた時点以降も法師であり、郡司との主従関係も保持しているのである。

このように、両本ともに、法師と郡司の主従関係がなくなった時点で、彼は法師と呼ばれる存在ではなくなる。そし

て、それが慶安版では借りてきた衣袈裟に着替えた時、神宮本では姿を隠す直前だったのである。

次にIIの部分の、邸内の者達と法師との関係から考えてみたい。第54話(第四三話)「玄賓僧都係念亜相ノ室家不浄観事」に、出奔前の玄賓の大納言邸への出入りが確認されるので、この邸内の者達は、以前から玄賓その人を見知っていたとすることができる。第1話(第一話)「玄賓遁世逐電事」に、同じ玄賓が法師の姿で渡し守をしているところに、「弟子ナリケル人」が偶然出会い、その正体に気付く場面がある。「誰是ニ似タラント思ヒメグラス程ニ、失テ年来ニ成我師ノ僧都ニ見ナシツ、ヒガ目ト見レドモ露程モ不違」と、眼前の法師が我が師であることを悟るのに暫くの間がある。さらに法師とは呼ばれないが、第三話(第三話)「平燈供奉晦レ跡趣ニ与州一事」で「門乞食」となっていた平燈を弟子である浄真阿闍梨が、師その人であると気付く場面でも、「心ヲツケテ能々思フニ、失セニシ我ガ師ニテゾ有ケル」と、少しの時間の後にその正体を見破る。これは、当初法師(渡し守)、乞食という仮面の上からその人物を見ていたことによる。つまり、仮面を見通しその正体を見抜くのに要した時間を、これらの暫くの間は示していると考える。

IIの部分では、両本に微妙に差異がある。慶安版では傍線部d「コ、ラアツマレル物ドモ此人ヲ見テハラ／＼トヲリヒザマツキテ敬」うのであるから、邸内の物達は、その人物の顔を見たのではなく、その人そのままそこに立っていたことを示している。衣袈裟に着替えた時点で、この法師は彼を見知っている人物からすれば、玄賓その人に立ち返ったのである。

また神宮本では、この部分は傍線部d「侍ヒニ集リタル者共怪シゲニ見ケルガ、縁ヨリ下ヌ」とし、彼らは最初その姿に「怪シサ」を覚え、その後誰であるかに気付き、縁から降りたのである。とするならば、そこに見られる一瞬の間は、借り物の衣袈裟を着てはいてもいまだ法師ではあったからに他ならない。「怪シゲニ見ケルガ」という語句が、玄賓

が法師という仮面を身に纏い続けていたことを鋭く示しているのである。

ほぼ同時期の『古事談』の同話では、法師と呼ばれるのは、衣袈裟に着替える時までである。但し、郡司は最後まで「郡司」とされ、また門外からの視線には敬語の意識を含まない（郡司ハ門外ニ留テ浅猿ト見居）。また、邸内の者達の反応は「暫ハアヤシゲニ思テ。能見知之後皆下跪于庭上」と、やはり少し間をおいたものとして示される。一貫した法師という呼称を軸にしているのは、神宮本独自の態度としてよい。

以上のように第2話（第二話）においては、神宮本では、玄賓はほぼ末尾まで法師であり続ける。この法師は実は玄賓なのだということは、両本ともにIII最末尾の傍線部h「是モ玄賓僧都ノシ態ニナム」まで全く示されない。法師という外見を信じていた者、郡司（同時に説話の読み手）が、その正体におぼろげながら気付いた時に、彼は忽然と姿を隠す。さらに急転直下、その実名が示され説話が閉じるといふ神宮本の迫真性を帯びた語りに注目したい。「是モ玄賓僧都ノシ態ニナム。有難カリケル人ナリ。」という、神宮本の説話の終え方は、前話の玄賓の像をも引き受けながら、玄賓その人に対する強い憧憬の念を感じさせずにはおかない。それに対し慶安版は、名前こそ明示しないものの、その正体については説話の途中から半ば見えており、末尾の「玄賓ノワザニナム」という語句は、弛緩してしまっていると言えうである。

では、なぜ玄賓は、神宮本で下級の僧たる法師であり続けなければならなかったのか。その鍵は、玄賓の姿の隠し方と、同様の法師の説話である第6話（第六話）「高野南筑紫ノ上人ノ発心ノ事」にありそうだ。

四

第6話(第六話)「高野南筑紫ノ上人発心ノ事」で、南筑紫上人が堂供養の導師を誰にするかと悩んでいると、夢に導師としては浄名居士が現れるだろうと告げられ、まさしくその時に「イト怪ケナル法師」が訪れる。この法師とは、明賢阿闍梨という高僧の「様ヲヤツシ」た姿であった。「是ヨリ高野ニハ、浄名居士ノ化身也ト、此阿闍梨ヲ云ナルベシ」と、これを契機として明賢阿闍梨を浄名居士の化身とする説が生まれたと説く。法師という姿を「ヤツシ」と捉えているのは注意されるが、先の玄賓の姿も同じく「ヤツシ」とみてよい。また玄賓自身も第54話(第四三話)「玄賓僧都係念垂相室家不浄觀事」に、「高キモ賤キモ仏ノ如ニ思ヒケル」とあるごとく、仏菩薩に擬せられるほどの人物であった。このような法師とは対照的なのが、第60話(第一二話)「乞食ノ僧陰徳事」に登場する「ナマメイタル僧」である。彼はある者の家に来て食物を乞うが、その際に語った様々なうそは悉く見透かされ、ついには跡をつけられて、その修行の様相が露見してしまう。この僧と法師という「ヤツシ」の差こそが、法師という階層の低さを示している。

権者かと疑われた瑠璃聖(第10話(第一〇話))も含めて、下賤な姿をした陰徳聖達の説話は、古く『日本靈異記』「聖徳太子示異表縁第四」に淵源する「隠身」の類型とみなすことができる⁽⁸⁾。法師を含め下層の者に「ヤツス」聖、聖人達の説話は、下賤な穢れた姿で現れた仏菩薩が、一瞬だけその本身を見せた後忽ちに消えていく説話と驚くほど類似している。

第1話(第一話)「玄賓僧都遁世逐電事」で、法師の姿で渡し守をしていたのを発見された玄賓は、「書キケス様ニ」姿を隠す。光明皇后に背中を擦られた癩は、阿闍梨であることを告げつつ「かきけつやう」に失せ(吉田本『宝物集』

卷六)、水の流れから出た化人とも伝えられた空也は、「かきつけように」姿を隠し(『閑居友』上巻四)、法師として淨藏の許に現れていた十一面觀音は「かきつけ様に」うせていく(『撰集抄』第一)。第七八話(神宮本ナシ)「中将雅通持法華經往生事」でも小法師に姿を変えた地藏は「カキケツヤウニ」失せる。玄賓の姿の隠し方は、これらと同じの地平で捉えられる。

玄賓説話が、法師の呼ばれる渡し守、馬飼いの要素を『古事談』・『発心集』で持つて以来、『閑居友』、『撰集抄』においてほとんど熱狂的に享受され続ける。それらの作品は同時に化現する菩薩の説話を取載するものであった。隠遁、出奔の聖の姿と先の菩薩の類型との交錯の様相を、現存の神宮本の法師という語、さらにそれを軸にした神宮本の第二話の最末尾の緊張感は、色濃く残しているのではないだろうか。

五

阿倍泰郎氏の言われる「 \wedge 聖なるもの \searrow は \wedge 穢れたもの \searrow そのものなかにある、という逆接的構造」は、やや形を変えて「ナマメイタル僧」と「イト怪シケナル法師」の対比の中にも生き続ける。玄賓は、「仏ノ如ニ」思われる人物であったからこそ、その「ヤツシ」た姿は法師でなければならなかった。その外見の卑賤さが、逆接的に彼の本当の姿の「アリガタキ」高貴さを保証する。最初の『打聞集』の説話で、天竺から達磨を尋ねてきた僧の言葉聞いて、唐王は「サハ、我ハ止无権者造罪」と驚く。達磨が権者と称される者であったがゆえに、彼はまた法師と人にもえたのである。

以上、『発心集』における法師に係る問題を、神宮本、慶安版の両本を比較しつつ検討した。法師の持つ下級、卑賤の僧という意味合いは神宮本の方がより明確に保持していた。それは、より仏教的な階層に厳密であろうとする、あるいは

は僧、男、女という仏徒の階層による説話配列を見せる神宮本の全体との連関による。しかしむしろ注意したいのは、下級、卑賤である法師という語を軸に、説話を組み立てる神宮本の態度である。第六話（第六話）の浄名居士の化身と言われた明賢阿闍梨の説法を「仏天モ驚キ給フ計リ日出クゾ」と表現する神宮本と、「ナベテナラズ日出ク」と表す慶安版では、法師という「ヤツシ」への意識、隠遁者を先の菩薩の姿へと読み替えていこうとする意識において、大きな懸隔があると言わなければならない。

注

- (1) 『打聞集』の引用は、複製本（古典保存会 27・8）による。以下引用に際しては、句読点・濁点は私に付し、明らかな誤写と思われる点、仮名遣い等は私に改めた所がある。送り仮名等は読解に資するものみに止めた。
- (2) 『平家物語辞典』（73・11 明治書院）306頁。
- (3) 山下正治氏「法師考」（立正大学教養学部紀要10 七六・一二）、同「法師考その二」（立正大学教養学部紀要11 七七・一二）、同「法師考その三」（立正大学教養学部紀要15 八二・二）、同「宝物集における法師」（立正大学国語国文20 八四・三）、同「勅撰集における法師」（立正大学国語国文23 八七・三）、同「喜撰法師考」（立正大学国語国文24 八八・三）。さらに「琵琶法師」の「法師」については、砂川博氏「琵琶法師考」（軍記と語り物26 九〇・三）の論考が有り、そこに中山太郎『日本盲人史 正編』（八木書店 七六・四複製発行）を引かれる。
- (4) 引用本文は、神宮本は神宮古典籍影印叢刊『西公談抄 発心集 和歌色葉抄書』（84・5 八木書店）により、慶安版は慶応義塾図書館蔵本を用いた。両本の説話番号は築瀬一雄氏「校註鴨長明全集」（80・8 風間書房）により、算用数字は神宮本の説話番号、漢数字は慶安版の説話番号であることを示す。
- (5) 慶安版独自の説話には「明康法師」（第七一話）、「僧延法師」（第七八話）などの中国僧の例があるが、法師号に對し別の意識があると思われるので、考察には含めなかった。
- (6) 「ヤゴトナキ」という語の連続に関しては、「異本『発心集』卷一考」（三田國文11 八九・六）に、神宮本全体の構成については「神宮文庫本『発心集』の構成」（國語と國文学69—9 九二・九）に言及した。登場人物の仏教的階層につき、

厳密に繰返しを厭わずに示す傾向は、例えば第9話（第九話）「止水谷ノ上人魚食事」における「壇越」、第25話（第二三・二四・二五話）「或ル上人客人ニ不会事」における「禪師」、「弟子」、第26話（第六三話）「證空阿闍梨師ノ命ニ替ル事」における「諸ノ弟子ドモ」等にみられる。

(7) 新潮古典集成『方丈記 発心集』（七六・一〇 新潮社）五二頁頭注

(8) 『日本霊異記』該話については、出雲路修氏『説話集の世界』（88・9 岩波書店）を参照した。

(9) 廣田哲通氏『中世仏教話の研究』（87・5 勉誠社）を参照した。

(10) 阿部泰郎氏「湯屋の皇后（上、下）——光明皇后湯施行説話をめぐりて」（文学54—11、55—1 八六・一一、八七・二）を参照した。

※ 諸書の引用は、『元亨釈書』、『古事談』は新訂増補国史大系に、『三国伝記』は中世の文学『三国伝記上』（76・12 三井書店）に、『閑居友』は勉誠社文庫125（85・8 勉誠社）に、『撰集抄』（85・4 桜楓社）によった。